

**2019（平成 31）年度  
武蔵大学 FD 活動報告書**

## 刊行にあたって

武蔵大学 学長 山寄 哲哉

本学のファカルティ・ディベロップメント (FD) 活動は、2000 年に実施した「授業評価アンケート」を契機に、学部における授業改善の試みとしてスタートした。その後、2010 年に「武蔵大学における FD 活動の基本的方針と課題」がまとめられ、本学の FD の基本枠組が以下の 5 項目にまとめられた。

- 1) 大学経営の中核的課題の一つとして FD・SD 活動を位置づける
- 2) 教育活動改善の取り組みを FD と定義する
- 3) 従来の取り組みの前進点を確認し、革新しつつ継承する
- 4) 学部等が主体的に関わる全学的推進体制を整備する
- 5) 学生・教員・職員の参加体制を構築する

これら 5 項目を念頭に、同年度から全学的な活動報告書がまとめられるとともに、FD 研修会、学生参加による FD フォーラム、大学院懇談会、ベストティーチャー賞など、さまざまな取り組みが行われてきた。これらの活動は、2014 年度の大学基準協会の認証評価においても、一定の評価を受けた。

さて、2019 年度の FD 活動の特徴は、以下の 7 点にまとめられる。

- ①昨年度に引き続き、副学長が FD 委員長を担ったことで、迅速な意志決定が可能となり、より一層の活性化が図られた。
- ②昨年度から実施している Web での授業評価アンケートの結果を用いることで、個人に紐付けられた分析が可能となった。
- ③FD フォーラム「学生と共に考える授業改善—専門ゼミナールや演習等の授業運営について—」を開催し、ロンドン大学とのパラレル・ディグリー・プログラム(以下 PDP)、グローバル・スタディーズコース、グローバル・データサイエンスコースの各プログラム及びコースに参加している学生も含め、授業改善に向けての様々な情報が共有できた。
- ④PDP が完成年度を迎えロンドン大学の学位取得者が 2 名出る中で、ロンドン大学の試験に合格することと当該科目の学びの深さを伝えることの間にはジレンマがあることが報告された。
- ⑤教務部 FD として、カリキュラム・マトリックスの活用が始まるとともに、ルーブリックの再検討の必要性が確認された。
- ⑥各学部の学びの成果発表の場としての「ゼミナール対抗研究発表会」「卒業論文報告会」「シャカリキフェスティバル」について、今年度の特徴が示された。
- ⑦昨年に引き続き大学院懇談会を開催し、大学院生との幅広い情報共有ができた。

尚、Web 化した授業評価アンケートにおいて回収率が初年度の 52.8%から 43.5%に低下したことについて、来年度に向けての対策を検討中であることも付記しておきたい。

## 2019 年度活動報告

FD 委員長 高橋 徳行

本学では FD 活動を定期的に検証し、活動内容を広く教職員の皆様に知っていただき、本活動をより良くしていくために、毎年度末に武蔵大学 FD 活動報告書を作成しています。本報告書は、その 2019 年度版になります。活動の詳細については、本書のそれぞれの報告内容をご覧くださいとして、ここでは 2019 年度の活動全体を、今年度から新しく始めた試みを交えて、振り返っておきたいと思います。

第 1 に、2019 年度の FD 活動の中で特筆したい点は、授業評価アンケートの設問項目を大幅に見直し、大学全体（全学）のディプロマ・ポリシー（以下 DP）に関連した設問を新設したことです。ご案内のとおり、全学の DP（学部）は次のように定められています。

- 1 リベラルアーツに基づく幅広い教養と専攻分野に関する十分な知識
- 2 「自ら調べ自ら考える」主体的かつ批判的な学習態度
- 3 異文化を理解し多様な他者と協働して社会に貢献できる対話力・共感力
- 4 グローバルな思考力と、これを支える十分な外国語運用能力
- 5 学修の成果や学習態度を実社会で生涯をつうじて活用できる実践力

この 5 つの文から成る DP を次のように 9 つの設問に分解しました。

- 1 グローバル市民として生きていくのに有益な幅広い教養が身についた
- 2 自分自身の専攻分野に関する十分な知識が身についた
- 3 主体的な学習態度が身についた
- 4 批判的なものの見方が身についた
- 5 異文化を理解し多様な他者と協働して社会に貢献できる対話力が身についた
- 6 異文化を理解し多様な他者と協働して社会に貢献できる共感力が身についた
- 7 グローバルな視点で物事を考える力が身についた
- 8 十分な外国語運用能力が身についた
- 9 学修の成果や学習態度を実社会で生涯をつうじて活用できる実践力が身についた

全学の DP でするので、科目によっては回答しにくい設問もあるということから、「授業内容が該当しない」という選択肢も設けることにしました

調査結果については、報告書本体に記述しましたが、例えば、社会学科が開講している授業群では、「批判的なものの見方が身についた」のスコアが高くなったり、英語英米文化学科やヨーロッパ文化学科では「グローバルな視点で物事を考える力が身についた」のスコアが高くなったりという特徴が見られました。また、「授業内容が該当しない」という設問への回答にも学部や学科、そして講義や演習など授業種別による違いがありました。

DP に定められた能力が卒業時までどの程度まで身についたのか、十分に獲得されていない能力があるとしたらそれはどのような能力なのかを分析して、常により良いカリキュラムや授業運営を考えていく必要があります。まだまだ不十分な点は多々ありますが、Plan Do Check Action(PDCA)サイクルをしっかりと回していくための第一歩ですので、この試みは来年度も継続します。

第2は、昨年度から新しく実施したことの定着化です。2018年度から新しく始めた試みは、授業評価アンケートのWeb化、学生が選ぶベストティーチャー賞にゼミ・演習部門（自調自考賞）を加えたこと、そして大学院の授業評価アンケートの3つになります。このうち、自調自考賞は、今年度も各学部から受賞者が誕生し、3学部中2学部は専任教員の演習科目（ゼミナール含む）が選ばれました。一方、授業評価アンケートのWeb化に関しては、回答率が40%台に大きく落ち込み、山崎学長が巻頭言でも触れていたように次年度への大きな宿題となっています。報告書でも、学部学科別、授業種別、そして専任・非常勤別の分析を行っていますが、共通して言えることは、科目ごと、担当教員ごとのばらつきが非常に大きいということです。専任教員のデータを見ても、履修生の9割から回答があったものから回答がゼロまで幅広く分布しています。

言うまでもなく、授業評価アンケートは、DPのPDCAサイクルを回していく上で重要な情報源であり、回答率の低さはその情報の質にも関わることで、来年度は回答率向上のための議論を年度初めのFD委員会で議論していきます。

第3は、毎年度実行していることですが、今年度もFD研修会、大学院懇談会、そしてFDフォーラムを実施しました。

FD研修会は「各種学生アンケートの分析報告」をテーマに実施し、大学院懇談会では特定のテーマを設定せずに教育、研究、施設等についての質疑応答を中心に経済学部の目時先生の司会で行い、FDフォーラムは「学生と共に考える授業改善—専門ゼミナールや演習等の授業運営について—」というテーマで、学生有志からの発表の後、学生、教員、職員間で懇談した。いずれも、本報告書に詳しく記載されているので、ぜひご一読いただければと思います。

最後に、FD委員会の活動ではありませんが、本学の特色ある教育について、本報告書に掲載しています。一つはゼミ活動を中心とした取り組みです。学部横断型課題解決プロジェクトは課題解決型の授業実践の事例であり、ゼミナール対抗研究発表大会（ゼミ大会）、卒業論文報告会、シャカリキフェスティバルは、学部ごとにその特質を活かしつつ行っている学生の研究発表の機会を提供しています。もう一つは、三学部におけるグローバル化に対応する教育です。経済学部についてはパラレル・ディグリー・プログラム、人文学部についてはグローバル・スタディーズコース、社会学部についてはグローバル・データサイエンスコースの取り組みについて紹介しています。

また、本報告書の最後には、会議記録、外部の研修会への参加記録、関連する事業報告書などを掲載しました。これらの記録を通じて本年度の本学のFD活動の状況を理解していただくことができれば幸いです。